

メタ語用論における敬語の位置付け

—敬語をどう捉えるか—

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、敬語をメタ語用論においてどのように位置づけるのが適切であるかを再考察する。語用論ではこれまで、敬語をどのように把握すべきかという課題に対して、異なる観点から様々な主張がなされてきた。例えば、敬語は a negative politeness strategy であると提唱するもの (e.g. Brown and Levinson 1987; 因 2005; Fukada and Asato 2004; 熊井 2009; Moriizumi 2009; 森山 2010; 滝浦 2005, 2008; 宇佐美 2001)、あるいは「わきまえ」(discernment) であると論じるもの (e.g. Hill et al. 1986; Ide 1989, 1992, 2006)、そして ‘indexicality’ (指標) を敬語の主軸とするもの (e.g. Agha 1993, 1994, 1998; Brown 2011; Pizziconi 2011, 2020; Pizziconi and Christie 2017)、などがあるが、敬語の位置付けは未だ決定的ではないように思われる。

上記の主張はそれぞれ敬語の特徴を抽出するという目的は果たしているが、一方で他説を批判する際、議論方向として疑問視せざるを得ない点も浮かび上がってくる。それは、「敬語」という用語を用いる中、敬語の形をしている言葉 (敬語の言語形式) は全て一括して、あるいは都合の良い一部を取り出して他説を批判している点である。例えば、Ide (1989) の「わきまえ」論は敬語だけではなくどの文化においても人との関わりにおいて必要とされる認識であるから、「わきまえ」が Brown and Levinson (1987) の politeness strategies と対照的な位置にあるとは言えない。ポライトネス・ストラテジーもその場におけるふさわしい「わきまえ」だからである (Pizziconi 2003; Kádár and Mills 2013; Obana 2017, 2021)。しかしながら、Ide が「わきまえ」の対象にしたのは規範的敬語 (conventional honorifics) のほうである。だから、speech level shifts に表れる敬語の言語形式を持ち出して (例: Cook 2011; Saito 2010; Shibamoto-Smith 2011)、両者を同じレベルで扱って Ide の敬語の捉え方を「静的」「イデオロギー的」とであると批判することはできない。なぜならスピーチレベルが上がる時に表れる敬語は同じ言語形式を呈している、規範的敬語とは異なる原理で機能しているからである。スピーチレベルシフトで生起する敬語言語形式を、筆者は strategic honorifics (Obana 2021) と名付けたが、「美化語」や個人的なスタイルとして敬語を誰にでも使う場合と同じく、「使用の動機」「使用相

手」「使用効果」において、規範的敬語と異なるため、この二つの種類の敬語言語形式は区別すべきである。本稿では conventional honorifics と strategic honorifics を比較することで、両者の明確な違いを明らかにしてみたい。

本稿では、さらに conventional honorifics も英語の politeness strategies も indexicality (指標性) の観点からは同位であると主張する論説も考察してみたい。Pizziconi (2011, 2020) 及び Pizziconi and Christie (2017) は、両者の言語現象における「規範性」に注目し、両者は言語イデオロギーを背景にその使用が社会化されているとして、指標性という概念の枠では同位である、と主張する。また、敬語が上下関係を示すのと同様に politeness strategies も社会的ポジションを明確に表すことができる点も同位の理由として挙げている。さらに敬語がスピーチレベルシフトなどに見られるようにストラテジーとしても自由に変化する点もポライトネス・ストラテジーと同様の機能(インタラクシオンにおける indexicals を提示する)を持っているとして、両者の同位性を論じている。

しかしながら、これは indexicality というあまりに大きい概念を適用するために起こる問題であると筆者は考える。Indexicality は、文化人類学的言語学では、言語形式を超える「意味」(社会における偏見、社会通念、アイデンティティなど)を考える上で利便性のある概念で、言語が示唆する文化的側面を分析するために利用されている。また、indexicality は、語用論の分野でも、implicatures つまり pragmatic meanings (語用論的意味)と同様に扱われ、対話における話し手の意図、聞き手の解釈、場面の効果など、そのコンテキストに表れる言外の「意味」に注目するのが常である。つまり、indexicality とは、イデオロギーからインタラクシオンのレベルまで全てを包括する言外の「意味」のことである。だから、ある言語現象を分析する際には indexicality のどのレベルで扱っているのか、どのカテゴリーに属するのか、を明らかにし、また、それぞれのレベルやカテゴリーでの下位分類も必要である。ところが、Pizziconi (2011, 2020) 及び Pizziconi and Christie (2017) は、indexicality という概念をそのまま適用して、敬語とポライトネス・ストラテジーは同じ図式メカニズム (the same schematic mechanisms) によって規則化されている、と論じている。

以上を踏まえて、本稿では次の2点を明らかにしながら、敬語のメタ語用論での位置づけを試みたい。

- (1) 「敬語」という言語形式は、社会的関係を表すための social index (社会的指標) である conventional honorifics (規範的敬語) と、話し手の意図や心理状態を表すためにストラテジーとして用いる敬語言語形式(本稿では strategic honorifics と呼ぶ)とは区別する必要がある。同じ言語形式を使用しているが、使用条件(目的)、ターゲット、効果が異なるため、異なる語用論的言語行為 (speech acts) の分類に属するからである。
- (2) 規範的敬語はポライトネス・ストラテジーとは異なる indexicality の分野で扱う

べきである。両者の言語構成（文の成り立ち）も、使用条件およびターゲット、そしてその社会的効果も異なるのであれば、indexicality の異なる下位類に属するので区別すべきである。

II 規範的敬語とストラテジー敬語の違いについて

1. 発話条件の相違：イデオロギー的規範¹⁾か、個々の心理状態表現か

Index という用語は、元々は、Charles Sanders Peirce が記号論 (semiotics) において、言語の記号 (sign) が言外に指し示す意味として扱ったことに始まる。例えば、代名詞や場所を示す here/there、時を示す today/tomorrow といったダイクシス (deixis) を扱ったのが始まりで、コンテクストに現れてはじめてその言語形式が示すものが明らかになる点に注目して、言語形式の意味を超えた解釈や意味合いを indexicality (指標) と名付けた。

Indexicality という用語はその後社会言語学、文化人類学的言語学などにも拡張して使用されるようになった。例えば、言語イデオロギーが各々の国における国語政策 (language policy) や標準語制定にどのような影響を及ぼすのかを研究したり (例: Joseph 1987; Munishi 2018)、方言の影響を受けるアクセントが社会にどのように受け入れられているのかを調査したり (例: Sharma et al. 2019)、女性語と女性としてのアイデンティティを分析したり (例: Ochs 1992) することで、言語が社会でどのような効果や機能をもたらすのかに焦点をあてる研究がある。語用論においては、indexicality をインターアクションのレベルで扱うことが多く、またこの用語を使用しなくとも、いわゆる pragmatic meanings というのは、対話中に認識される indexicals と同義である。Illocutionary acts はその典型的な例であり、ポライトネスしかり、話者のスタンスや態度などあらゆる語用論的要素が indexicality のカテゴリーに入る。

Indexicality という用語が社会言語学や文化人類学的言語学で流布している原因のひとつに、indexicals²⁾ が時に “indexical orders” (指標が社会の規律となること) (Silverstein 2003) に発達する、あるいはその方向を目指すという点が挙げられる。つまりイデオロギー的に発達した「規範」(norms) として社会全体に定着する言語現象は、上記の分野では重要な要素として扱われるからである。方言、言語差別 (例: 少数派の言語が社会的に下に見られるなど)、言語と文化の関係などの研究において indexical orders を取り上げることで、その社会における規範、因習的指標 (conventional indexical) の実態を明らかにするのが上記の分野の大きな流れのひとつだからである。敬語も indexical

1) 言語におけるイデオロギーとは、ある一定の言語現象が常識や通年として社会に浸透し、制約や統制の力も持つという思想、観念のことである (尾鼻2021: 22-26参照)。

2) Indexicality は「指標」という概念を表すが、indexicals は個々の指標の例を示す。

order として扱われ、「社会的イデオロギーのひとつであり、社会の構成員が（敬語がもたらす）因習的指標効果（conventional indexical effects）を認識することを促すもの」（Agha 1993: 135 — 筆者訳）と定義されている。簡単に言うと、敬語は社会的規範（social norm）であり、その使用が期待されている時に使用しない場合、社会的制裁が下されるほど（小山 2011; 渡辺 1994参照）社会に浸透している、という意味である。

上記のような定義に値する敬語は、規範的敬語（conventional honorifics）に限る。同じ敬語の言語形式を用いながらも、スピーチレベルシフトの現象のように対話中に話者の選択によって忽如として敬語を使う strategic honorifics には当てはまらない。何故ならストラテジー敬語は、社会の規範、イデオロギーに基づいて使用されるのではないからである。話者の心理状態やその場のスタンスがスピーチレベルアップとなる敬語使用に現れるのであって、使用しなかったからといって社会的制裁が下されることもない。

ポライトネスというのは「距離」の問題であるというのが定説である（cf. Ikuta 1983）。これは敬語様式使用にも当てはまる。規範的敬語においては distance は次のような社会的関係を具現する（cf. 蒲谷ら 2009; 熊井 2009; 滝浦 2005）。

1. vertical distance：縦の距離 — 地位や年齢の上下関係
2. horizontal distance：水平距離 — 親疎関係
3. spatial distance：空間距離 — 公共の場

上下関係とは、職場における地位の差、年齢差、力関係を示す。親疎関係³⁾ は社会的に近いか遠いかという関係（例えば、知らない人と知っている人、家族と家族外）を表し、公共の場は会議の場、式典などにおける公けの場などを示す。上記の distances は一場面に一つずつ適用されるのではなく、場面に応じて互いにかみあって敬語使用という具現化に繋がり、distance の度合いによっても敬語のレベルが異なったり、使用・不使用の決定にも関与している。例えばロックコンサートにおけるミュージシャンが敬語使用を限定するのは、horizontal distance を縮め spatial distance が無いかのように振る舞うことで、ファンとの距離を近づけ親しい雰囲気を作ろうとするからである。普段敬語を使わない親しい同僚が、会議で敬語を使うのは、spatial distance を認識しての結果だと判断できる。だから、conventional honorifics は、必ずしも固定された静的なものではないが、上記の distances を考慮して使用する限り他者との社会的関係を指標するという基本的な性質は変わらない。

一方、strategic honorifics は、上記のような distances を考慮して社会的関係を指標するのではなく、むしろ distance という概念を話者の選択によって操作し、話者のその場における心理状態やスタンスを表すために使用する。特にスピーチレベルシフトにおける敬語の一時的使用は、対話における speech acts であって、社会的な指標（social

3) ここにおける「親疎関係」とは社会的な親疎を示す。心理的に近い（親しい）遠い（親しく思わない）とは別物である。組織における「親」とは、例えば他の組織（疎）に対して自己の組織の構成員の存在を言う。

index) を示すものではない。コンテキストによっては、話者が「皮肉」を表したり (例: Okamoto 1999)、自己防衛を示したり (例: Shibamoto-Smith 2011)、改まった感謝や深い謝罪を表したり (例: Obana 2016)、話題を変える時の慎重さを示したりする (例: 竹田 2011)。以上をまとめると、conventional honorifics と strategic honorifics は使用の動機あるいは条件が次のように異なる。

- 1) 規範的敬語は言語イデオロギーが持つ象徴的価値によって社会に位置付けられ、その価値が敬語活動を方向づけ、調整、規制している。一方、ストラテジー敬語は個々の話者が選択し、一時的な心理変化を示すために使用される。
- 2) 規範的敬語は vertical/horizontal/spatial distances を認識することで、他者との社会的関係を指標する機能を持つ。一方、ストラテジー敬語は敬語が指標する distance を操作することで、コンテキストによって様々な語用論的意味を提示する。

2. 敬語使用の対象及び効果の相違

規範的敬語は、聞き手を対象にする以外に、対話に現れる第三者 (referent person) 及び bystander と呼ばれるその対話場面にいるが対話に直接参与していない傍観者も敬語使用の対象となる。いずれの場合も、話者と敬語使用対象者との間の社会的関係を指標している⁴⁾。以下の下線部はそれぞれの敬語使用対象者を示している。

- (1) よかったらこれ、召し上がってください。(hearer)
- (2) 田中さん、部長が呼んでいらっしゃいます。(referent person)
- (3) お母さん、課長さんが送ってくださったの。(bystander)

一方、strategic honorifics は、聞き手が対象である場合が多い (例: スピーチレベルシフト)。あるいは、表面的に第三者に対して敬語を使用する時もあるが、この場合、話者の心理的意図を聞き手に伝えるのが目的であるので、敬語使用の対象は誰なのかというよりも、話者の「敬語使用の目的」のほうが優先的であって、それを聞き手が解釈の鍵として受け取る、と判断するほうが適切であろう。例えば、次の発話では、表面上報道関係の行動が敬語使用の対象とはなっているが、これは発話者が報道関係の素早い行動を皮肉っているのであって、それを周りにいる捜査陣が聞いているのである。

- (4) 『相棒』 Season 7, No. 11

(拳銃を持った犯人が住宅街に潜在しているので、そのあたりを捜査二課が回り、注意喚起をしているとき報道のヘリコプターが上空を飛んできた)

角田: 報道か、はやいお出ましだね。

だから、strategic honorifics はその役割上話者の意図が聞き手に適切に伝わったかどうかの主な目的となる。確かに、例 (4) における「報道陣」は皮肉のターゲットとはなっ

4) 例 (2) の発話では、話者と敬語使用対象者 (田中) との社会関係以外にも、話者と聞き手との関係が同等あるいは話者が下位であることも指標として表れている。

いるが、発話の意図（報道陣の行動を皮肉として伝える）は聞き手を対象としたものとして捉えることができる。

次に敬語使用の効果について考察する。規範的敬語は適切な使用によって deference（敬意）を表す。上下関係、親疎関係、公共の場を認識し、それを敬語という言語形式で具現するのである。しかし、敬語は deference を指標し得るが、必ずしも politeness を示すとは限らない（Agha 1993, 1994; Haugh 2010; Hijirida and Sohn 1986; Hwang 1990）。何故なら適切な敬語形式を使うことで deference を表しても、発話におけるストラテジーが不適切であれば、impolite だと判断されるからである。例えば、

(5) 『相棒』 Season 12, No. 12

伊丹：今回はいいようにこきつかっていただきまして。どうも。

杉下：どうも。

伊丹刑事が事件に巻き込まれ、それを解明するために杉下警部が捜査を行うが、その間伊丹に指示を出しているいろいろ行動してもらう。全てが解決した時、元々伊丹と杉下とは良好な関係ではないため、最後の挨拶として、伊丹が例（5）にあるような発話をする。ここでは杉下のランクが上であるため、「いただきまして」と適切な敬語は使われているが、「こきつかって」という言葉は相手に対して polite どころか、上位の人間に使うには不適切である。だから、敬語形式は deference を表す一方で発話の内容（ストラテジー）は impolite であると判断できる。

何故 deference と politeness との間に不一致が起こるかということ、敬語を使用した発話は、二重構造になっているからである。つまり、deference の可能性を司る敬語形式（markings 指標）と politeness を導く発話のストラテジーという二重構造になっているからである。我々は慣習に従って「敬語」という用語を使っているが、厳密に言えば本来「敬語」という「言語」（意味を持つ言葉の集合）が存在するわけでもなく、日本語の言語体系に「敬語」にあたる目録（lexicon）が存在するわけでもない。例えば、尊敬体を作る「お～になる」には、意味論的意味（semantic meaning）はなく、敬語体へと変換する「指標」に過ぎない。例えば、「休む」を尊敬体にすると「お休みになる」となるが、これは形態論的には二重構造を持っていて、「休む」という意味を持つ形態素に「お～になる」という命題の意味を持たない形態要素が施されたと解釈できる。これは次の節でさらに詳しく調べる。次節では敬語とポライトネス・ストラテジーとは区別する必要があると主張するが、その理由のひとつとして、敬語を含む発話が二重構造を持つ点が挙げられるからである。

次にストラテジー敬語のもたらす効果について考察する。ストラテジー敬語には、女性が相手がどの人であろうと敬語を用いて自分の女らしさ、上品さを強調する場合があるが、その特徴として「デス・マス」が省かれることが多い。例えば、「半沢直樹」というドラマでは、伊勢島ホテルの羽根専務（女性）が、最後に辞任する時に、ホテルで半沢と

出会う。半沢はホテルへの融資を行う銀行員であり、羽根は半沢にとって顧客でもある。

(6) 『半沢直樹』第十話

羽根：あら、最後にお会いするとはね。

．．．

羽根：あなたたちのしたことが本当にこの伊勢島のためになったのかどうか、これからじっくり拝見させていただくわ。

羽根はドラマの中で専務として半沢と交渉する場面では、「デス・マス」を使用しているが、これは組織同士の話し合いにおける規範的敬語といえるが、例(6)における敬語形式は、規範的敬語とは言い難い。何故なら羽根は半沢に対して例(6)のようなレベルの高い敬語を使いながらも文末に「デス・マス」を使っていない。そこで、これは女性の使用するストラテジー敬語であると判断できる。女性の中には個人的なスタイルとして例(6)のような敬語使用をするからである。

ストラテジー敬語にはスピーチレベルシフトにおける敬語の一時的使用もある。コンテクストによっては、その敬語使用が話し手の「弱さ・脆さ」(Maynard 2001)を表したり、「自己防衛」(Shibamoto-Smith 2011)、「用心深さ・慎重さ」(Obana 2016)を示したりする他、「感謝の気持ちの強調」(Obana 2021)や「ステージパフォーマンス」(Cook 1996, 2008, 2011)を示唆したり、と様々な語用論的意味をもたらす。これらの多様に渡る効果を Obana (2021: 129-130) は、3種に分類している。

1. psychological barriers — irony, vulnerability, conflict, self-defence, aloofness
2. cautiousness — indebtedness in thanking, humbleness in apologising
3. stage performance — playing the role of a different person, announcement

1つ目のグループの例としては、上記の例(4)の皮肉が挙げられる。2つ目のグループには、普段敬語を使わない友達に対して心から謝る場合「ほんとにごめんなさい」とか、厚く礼を言う場合「助かったよ。ほんとにありがとうございました」と改まった発話をする例がある。3つ目のグループには、次の例がある。

(7) 『半沢直樹』第七話

渡真利：おーい、生きているかい。

近藤：どうせ何も食ってないんだろう、へへっ。

渡真利：はい、牛井です。

(Obana 2021: 128より抜粋)

半沢が遅くまで仕事をしているところへ、親しい同僚の近藤と渡真利が差し入れを持ってくる。渡真利が「牛井です」とデリバリーサービスのフリをして、ユーモラスに半沢に差し入れを渡す。世話焼きが気恥ずかしいのか、親友という立場から少し離れて、別の役割をすることで、その照れを隠しているようにも解釈できる。

以上、規範的(因習的)敬語とストラテジー敬語の相違について考察してきたが、ま

めると次の表1のようになる。

表1：規範的敬語とストラテジー敬語の相違

	規範的敬語	ストラテジー敬語
発生条件	<ul style="list-style-type: none"> * 社会的関係（上下関係、親疎、公共の場） * イデオロギー的指標 * 社会的に浸透している 	<ul style="list-style-type: none"> * 話者の意図として選択 * 対話中における一時的な指標
対象	<ul style="list-style-type: none"> * 聞き手、対話中の第三者、対話を聞いている傍観者 	<ul style="list-style-type: none"> * 主に聞き手 * 第三者（話者の意図を伝える対象は聞き手）
効果	<ul style="list-style-type: none"> * 敬意 	<ul style="list-style-type: none"> * 話者の意図を表示（防御的態度、慎重さ、別人物のフリ） * 個人的なスタイル

Ⅲ 規範的敬語とポライトネス・ストラテジーの違いについて

敬語の機能が indexicality 「指標」である点に注目して、Pizziconi (2011, 2020) 及び Pizziconi and Christie (2017) は、英語のポライトネス・ストラテジーと敬語は indexicality においては同位であると主張した。その理由として、両者とも言語イデオロギーに裏付けされた言語現象であるので、実際に使用する際に社会的規範に従っている点を挙げている。また、両者とも社会的関係、特に上下関係を表す手段としても使われる点、さらに対話において様々に変化する柔軟な機能の面も両者が共に兼ね備えている点も共通項として挙げ、indexicality という概念の見地から言えば、両者は同位として扱えると述べている。

しかしながら、上記の3点は、どの言語においてもポライトネス現象を成す共通項であって、敬語と英語のポライトネス・ストラテジーの両者のみに特化されたものではない。これは indexicality が語用論的な要素全てを包括する大雑把な概念で適用範囲が広いために起こる問題で、両者に限定した同位性を説くには indexicality のどのレベルで、どの領域において、どのような種類において共有している要素があるのか、まで掘り下げなければ、納得のいく議論とはならない。単に「指標」というコンセプトで括るのは、不十分な試論であろう。

本稿では、敬語はポライトネス・ストラテジーとは異なるレベル及び種類の indexicality に属すると主張する。その理由として次の3点を挙げる。

- ① 敬語とポライトネス・ストラテジーは異なる文法領域から発生する言語形式であ

る。また敬語は「敬意」を表すがポライトネスを必ずしも指標しない。

- ② 敬語は対話の内容に関係なく、社会的に要求（期待）されて上下関係を表す指標であるが、ポライトネス・ストラテジーが表す上下関係は対話中の内容によって必要と判断されてはじめて現れる。あるいは、ある場面で上下関係を明らかにすることで交渉しやすい流れを作るために利用する方略である。
- ③ 敬語は、規範的敬語とストラテジー敬語の区別があり、後者は話者の意図や態度を示すために使うので、言語イデオロギーに裏付けされた現象ではない。だから、言語イデオロギーであるポライトネス・ストラテジーと同位相で比較することはできない。

上記の理由③については、前節で、規範的敬語とストラテジー敬語は異なる言語行為 (speech acts) として区別する必要があると主張した。一方は言語イデオロギーを背景とする言語現象であり、他方は対話中の話者の意図を表すための一時的な方略だからである。拠って、言語イデオロギーである英語のポライトネス・ストラテジーと同等の比較ができるのは規範的敬語のほうであって、ストラテジー敬語をこの比較に持ち込むことはできない。

さらに、英語のポライトネス・ストラテジーとスピーチレベルシフトなどに現れる敬語の言語形式（本稿ではストラテジー敬語と呼んでいる）は、様々な indexicals を表すという柔軟性があるとして、Pizziconi (2011, 2020) 及び Pizziconi and Christie (2017) は両者の同位性を主張している。しかし、ポライトネス・ストラテジーは、FTAs を軽減するために使われる方略であるが、ストラテジー敬語は FTAs と関係がなく話者の心理状態を表す手段として敬語の言語形式を使うのであって、両者における柔軟性のみに焦点をあてるのは短絡的である。また、Pizziconi らは敬語と呼ばれる言語形式一切を一括りにして扱っているが、上記の③の理由について述べたように、これも問題である。

次に上記の①の理由であるが、前項でも述べたように、honorific markings を含む発話は二重構造を持つという点が根拠となる。即ち、いわゆる「敬語」はストラテジーを施した言語単位に honorific markings を文法的に組み込んだ構造を持つ。例えば、

(8) 『宿命と真実の炎』

理那：藤堂さんに少しお話を伺わせていただきたく、まいりました。

これは、他の刑事課所属から来た若い理那が年上の藤堂に対して発した言葉であるが、「伺わせていただきたく」「参りました」という言葉を我々は通常「敬語」と呼んでいる。しかし、厳密に言うと、これらの言葉はストラテジーとして構築した発話がある一定の文体に転換させたものである。この時文体転換を担うのは honorific markings という「指標」、あるいは morphological operations 「形態論的操作」、平たく言えば「文体転換装置」であって、日本語の下位分類として「敬語」と名付けられる表現のセットが存在しているわけではない。これは次のような図式で表すことができる。敬語という markings を取り

去ると、例（9）のようになる。

(9) 少し話 を 聞かせて もらいたく、来た。

ストラテジー (少し、～せ、もらう)

honorification

(10) 少し お話 を 伺わせて いただきたく、まいりました。

例（9）は、ポライトネス・ストラテジーを用いて構築した発話である。つまり、「少し」（負担軽減）、「～せ」（許可要請）及び「もらう」（相手に請うスタンス）というストラテジーを用いて、相手への脅威があると思われる行為（FTAs）を和らげ、ポライトネスを表している。そして、この発話に honorific markings を施すと例（10）の発話になるが、この敬語化というプロセスで例（9）と（10）の持つ propositional meanings（命題としての意味。概念としての意味）は変化していない。だから敬語を用いた発話とは、ストラテジーで構築した発話に、honorific markings が文法的に組み込まれたものという二重構造を持つのである（Obana 2017, 2021）。つまり、honorific markings とポライトネス・ストラテジーは、異なる文法領域から発していることになる。前者は意味論に属さず形態論的に転換する語用論的現象であり、後者は統語論において言語単位を配列した意味論的現象だからである。

上記の違いは両者のもう一つの差異を生み出す。ポライトネス・ストラテジーはその名のごとく、ポライトネスを目指す方略である。しかし、敬語は適切に使うことで deference（敬意）を表すが、敬意はそのままポライトネスに直結するとは限らない。例えば、例（5）の伊丹の発話は、敬語によって表面上は目上（杉下）への敬意を表しているが、発話全体は、ポライトネスを示しているとは言い難い。これは、honorific markings は適切だが、発話におけるストラテジーが不適切であるため起こるのである。逆に言えば、ストラテジーがポライトでなくとも honorific markings によって、deference は表すことができるのである（しかしながら、結果としては deference は偽造となり、あざけりや皮肉となり得る：例（5）参照）。つまり politeness と deference は異なる言語形式から抽出されるので、両者を区別する必要がある。ということは、honorific markings とポライトネス・ストラテジーは、その使用効果においても異なるということになる。

さらに、両者は使用する際の目的あるいは発生の条件においても異なる。ポライトネス・ストラテジーは相手にアプローチする際に相手への脅威があると思われる行為を和らげるために使用される言語ツールである。しかし、敬語は社会的関係を認めた際にそれを言語的証拠として提示する機能を持っているが、言語行為に脅威があるかどうかには関与しない。つまり、敬語は、対話中の発話の内容がどんなものかを考慮して現れるのではな

く、発話以前に認知する社会的関係（上下、親疎など）を敬語という言語形式で具現するのである。以上、敬語とポライトネス・ストラテジーは異なる文法領域から発生し、また、語用論的にも前者は「敬意」後者は「ポライトネス」を指標するという理由で、両者は同位として扱うことはできない。

次に両者を区別する2つ目の理由として、上下関係を表す場合も両者は異なる indexicality の領域を占めるという点を挙げる。どこで誰と対話するのかを認識することで対話相手との社会的関係が明らかになると、敬語はその社会的関係を認識しているという言語的証拠として使われる。だから対話の内容や目的（依頼、オファ、交渉など）に関係なく、敬語は現れる。Matsumoto (1988) が敬語のことを“relation-acknowledging devices”と名付けたが、このことを端的に表している。また、敬語は社会の力関係においては目下が目上に使用する一方通行の言語現象である。

他方、英語のポライトネス・ストラテジーにおいては、上下関係を認知していてもそれが言語的に（ストラテジー的に）絶えず対話中に顕現されているわけではない点が規範的敬語と異なる。例えば、Holmes and Stubbe (2003) は、企業での会話を分析して、普段は力関係を示すような対話の運びがなくお互いに同等に話をしているが、目下が目上に交渉したり自分の意見を通したい場合になると、力関係の表面化と見られるストラテジー（例：相手が目上であることを述べる、ためらいを表す言葉を使う）を使うと主張している。また、Locher (2004) や Farrokhi and Arghami (2017) では、目上が決断を下したり交渉や会議で統制したり管理する必要がある場合、力関係を示すストラテジーを使うと述べている。例えば、選択肢のない決定的な発話や FTAs があると判断されても相手にダイレクトに要請する方法によって自分の社会的地位を言語的に明確にするという。しかしながら、このようなストラテジーは、対話中に力関係を明確にする必要性があってはじめて現れる。つまり、コンテキストの流れの中で一時的に表れるのであって、敬語のように最初から最後まで（コンテキストによって敬語のレベルが多少変化することはあっても）上下関係を示す現象とは異なっている。しかも目上も目下もストラテジーの種類は異なるとはいえどちらの側からもある一定のストラテジーを使うことで上下関係を明示できる。ストラテジーによって目上は目上であることを示し、目下は相手（目上）が決定権を持つということを認識していることを示唆するのである。しかし、敬語は目下から目上に使う一方通行事象である。

以上、indexicality のレベル別、下位分類別に渡って細かく調べることによって、敬語と英語のポライトネス・ストラテジーは indexicality の下位相において異なるカテゴリーに配置されるということが明確になった。拠って、両者を同位とする主張は受け入れがたいという結論になる。両者の差異をまとめると次の表2のようになる。

表2：規範的敬語と英語のポライトネス・ストラテジーの相違

	規範的敬語 (honorific markings)	ポライトネス・ストラテジー
文法構造	<ul style="list-style-type: none"> * 二重構造 (ストラテジーで構築した発話に honorific markings を施したもの) * honorific markings は意味論的意味はなく、社会的指標 	<ul style="list-style-type: none"> * ストラテジーを用いて構築した発話 * 意味論的意味 (命題的意味) を持つ
発生条件	<ul style="list-style-type: none"> * 社会的関係 * 話者が相手との社会的関係を認識して言語的に具現する 	<ul style="list-style-type: none"> * 対話の流れによって発生 * 話者が持つ発話の目的達成のための交渉手段
効果	<ul style="list-style-type: none"> * 敬意 	<ul style="list-style-type: none"> * ポライトネス
上下関係の表し方	<ul style="list-style-type: none"> * 社会的に指標 * 目下から目上へと一方方向 	<ul style="list-style-type: none"> * コンテキストにおいて上下関係を明確にする手段 * 対話の両者が表せる

IV まとめ

本稿では、敬語をメタ語用論においてどのように位置づけるのが適切であるかについて考察してきた。敬語という用語を使う場合、敬う意味の言葉が集合している目録 (lexicon) が存在しているかのように扱われることが多いが、実は「敬語」とは発話の一部をなす honorific markings という形態要素のことであって、元々ストラテジーで構築した発話に markings を施した、文法的転換装置のことである。だから意味論的意味 (命題的意味) はなく、社会的指標のみが機能しているのである。その社会的指標は、イデオロギー的背景を持ち、社会的行動に多大な影響を及ぼしている。これは規範的敬語の特徴である。

どの言語においても見られる現象として、規範的言語から派生したり逸脱したりして別の目的や効果を狙って同じ言語形式を使うことがある。例えば thank you は規範的には相手の親切や思いやりに対して感謝の気持ちを表す言葉であるが、悪口を言った相手に対して皮肉を込めてこの言葉を使うことがある。この場合、thank you に独自の語用論的意味を持たせて使うと分析できる。しかし、thank you の持つ規範性は背景として流れているので、否定的な形で「感謝」を表すことで逸脱性が際立つのである。同じように、敬語の言語形式を利用して話者の意図や心理状態を表す手段として使うストラテジー敬語も、規範的敬語の持つ distance を操作することで、コンテキストによって皮肉や別人のフリをすること、警戒心などの効果を狙う方略として存在する。しかし、同じ言語形式を使っているとはいえ、規範的敬語とストラテジー敬語は、発生の条件、効果、対象が異なるため、別個の言語行為 (speech acts) であるとして区別すべきである。

さらに、規範的敬語がポライトネス・ストラテジーと同位の indexicality を持つという

議論も受け入れがたい。両者は発生条件も、上下関係の表し方も、効果も異なる。だから、両者は indexicality の異なるレベルに属し、indexicals の下位分類においても分別されるので、同位として扱うことはできない。さらに、敬語を含む発話はストラテジーを駆使した発話に honorific markings を施した二重構造を持つので、「敬語」は命題の意味を持たないので語用論の世界のみで扱われるが、ポライトネス・ストラテジーは発話全体が命題の意味を持つ意味論の世界に属する。

Brown (2011) が敬語を indexical politeness⁵⁾ とし、ポライトネス・ストラテジーを modulation politeness として区別したが、敬語の指標性（社会的関係の指標）を指摘し、ポライトネス・ストラテジーの持つ「調整」（コンテキストの中でどのようにポライトネスを達成できるかと調整すること）とは差異があると主張したが、両者の持つ根本的な差異を明確に指摘している。本稿では、さらに詳細に渡ってポライトネス・ストラテジーと比較することで規範的敬語とポライトネス・ストラテジーの差異を明らかにした。また、ストラテジー敬語と規範的敬語を比較することで、規範的敬語の特徴を浮き彫りにした。

参考文献

- Agha, Asif (1993). Grammatical and indexical convention in honorific discourse. *Journal of Linguistic Anthropology*, 3 (2), 131-163.
- Agha, Asif (1994). Honorification. *Annual Review of Anthropology*, 23, 277-302.
- Agha, Asif (1998). Stereotypes and registers of honorific language. *Language in Society*, 27, 151-193.
- Brown, Lucien (2011). *Korean Honorifics and Politeness in Second Language Learning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 因京子 (2005). 『日本語のポライトネス：その制度的側面と語用論側面』。九州大学韓日言語文化研究 6, 35-66.
- Cook, Haruko M. (1996). Japanese language socialization: indexing the modes of self. *Discourse Processes*, 22, 171-197.
- Cook, Haruko M. (2008). Style shifts in Japanese academic consultations. In Jones, Kimberly and Ono, Tsuyoshi (eds.), *Style Shifting in Japanese*, pp. 9-38. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Cook, Haruko M. (2011). Are honorifics polite? Uses of referent honorifics in a Japanese committee meeting. *Journal of Pragmatics*, 43, 3655-3672.
- Farrokhi, Farahman and Arghami, Mina (2017). An investigation of the use of politeness strategies in refusal among characters with different power relations in English and Farsi novels. *International Journal of Applied Linguistics & English literature*, 6 (7), 180-191.
- Fukuda, Atsushi and Asato, Noriko (2004). Universal politeness theory: application to the use of

5) 厳密には、敬語はポライトネスを導くのではないので、indexical politeness というのは適切ではない。Obana and Haugh (in press) では、Agha (1993) などが人類学的言語学で使用する social index という用語を用いて、ポライトネス・ストラテジーとの区別を論じている。

- Japanese honorifics. *Journal of Pragmatics*, 11, 131-146.
- Haug, Michael (2010). Deference and respect. In: Locher, Miriam A. and Graham, Sage L. (eds.), *Interpersonal Pragmatics*, pp. 271-288. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hijirida, Kyoko and Sohn, Ho-min. (1986). Cross-cultural patterns of honorifics and sociolinguistic sensitivity to honorific variables: Evidence from English, Japanese, and Korean. *Papers in Linguistics*, 19, 365-401.
- Hill, Beverly, Ide, Sachiko, Ikuta, Shoko, Kawasaki, Akio, and Ogino, Tsunao (1986). Universals of linguistic politeness — Quantitative evidence from Japanese and American English —. *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Holmes, Janet and Stubbe, Maria (2003). *Power and Politeness in the Workplace*. London: Longman.
- Hwang, Juck-Ryoon. (1990). “Deference” vs. “politeness” in Korean speech. *International Journal of the Sociology of Language*, 82, 41-55.
- Ide, Sachiko (1989). Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua*, 2, 223-248.
- Ide, Sachiko (1992). On the notion of wakimae: Toward an integrated framework of linguistic politeness. In *Mosaic of language: Essays in honour of Professor Natsuko Okuda*. Mejiro Linguistic Society, 298-305.
- 井出祥子 (2006). わきまへの語用論. 大修館
- Ikuta, Shoko (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science*, 5, 37-53.
- Joseph, John E. (1987). *Eloquence and Power: The Rise of Language Standards and Standard Languages*. New York: Basil Blackwell.
- 蒲谷宏, 金東奎, 高木美嘉 (2009). 敬語表現ハンドブック. 大修館.
- Kádár, Z. Daniel and Mills, Sarah (2013). Rethinking discernment. *Journal of Politeness Research*, 9 (2), 133-158.
- 小山亘 (2011). 近代言語イデオロギー論. 三元社.
- 熊井宏子 (2009). 『日本語のポライトネスと対人行動に関する一考察』. 静岡大学国際交流センター紀要, 1-26.
- Locher, Miriam A. (2004). *Power and Politeness in Action*. Berlin/NY: Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yoshiko (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426.
- メイナード泉子 (2001). 恋する二人の感情言葉—ドラマ表現の分析と日本語論. くろしお出版.
- Moriizumi, Satoshi (2009). Face concerns and requests in Japan: Exploring the effects of relational closeness and social status. *Journal of Intercultural Communication Research*, 38(3), 149-174.
- 森山由紀子 (2010). 『現代日本語の敬語の機能とポライトネス—上下の素材敬語と距離の聞き手敬語』. 同志社女子大学 日本語日本文学22号, 1-19.
- Munishi, Shkumbin (2018). Language and ideology in the context of language policy of Albanian language. *Journal of Educational and Social Research*, 8(2), 125-132.
- Obana, Yasuko (2016). Speech level shifts in Japanese — A different perspective: The application of Symbolic Interactionist role theory. *Pragmatics*, 26(2), 247-290.
- Obana, Yasuko (2017). Japanese honorifics re-re-visited. *Journal of Politeness Research*, 13(2), 4-31.

- Obana, Yasuko (2021). *Japanese Politeness: An Enquiry*. London: Routledge.
- 尾鼻靖子 (2021). 『武装する敬語 (2) —敬語イデオロギーと目下の応』. 関西学院大学 言語と文化24号, 21-36.
- Obana, Yasuko and Haugh, Michael (in press). *Sociopragmatics of Japanese: Theoretical Implications*. London: Routledge.
- Ochs, Elinor (1992). Indexing gender. In Rethinking context: Language as an interactive phenomenon. In: Duranti, Alessandro and Goodwin, Charles (eds.), pp. 335-358. Cambridge: Cambridge University Press.
- Okamoto, Shigeko (1999). Situated politeness — Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversation. *Pragmatics*, 9, 51-74.
- Pizziconi, Barbara (2003). Re-examining politeness, face and the Japanese language. *Journal of Pragmatics* 35, 1471-1506.
- Pizziconi, Barbara (2011). Japanese honorifics: The cultural specificity of a universal mechanism. In: Kádár, Daniel Z. and Mills, Sarah and (eds.), *Politeness in East Asia — Theory and Practice*, pp. 45-70. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pizziconi, Barbara (2020). Social deixis in Japanese. In: Jacobson, Wesley M. and Takubo, Yukinoi (eds.), *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, pp. 733-772. Berlin, Boston: De Gruyter.
- Pizziconi, Barbara and Christie, Christina A. (2017). Indexicality and (im) politeness. In: Culpeper, Jonathan, Haugh, Michael and Kádár, Daniel Z. (eds.), *The Palgrave Handbook of Linguistic (Im) politeness*, pp. 143-169. London: Palgrave Macmillan.
- Saito, Junko (2010). Subordinates' use of Japanese plain forms: An examination of superior-subordinate interactions in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 42, 3271-3282.
- Sharma, Devyani, Levon Erez, Watt, Dominic, Yang Ye, and Cardoso, Amanda. (2019). Methods for the study of accent bias and access to elite professions. *Journal of Language and Discrimination*, 3 (2), 150-172.
- Shibamoto-Smith, Janet S. (2011). Honorifics, 'politeness', and power in Japanese political debate. *Journal of Pragmatics*, 43, 3707-3719.
- Silverstein, Michael (2003). Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life. *Language & Communication*, 23, 193-229.
- 竹田直子 (2011). 『同一談話におけるスピーチレベルシフトについての考察』. 関西学院大学言語コミュニケーション研究科修士論文.
- 滝浦真人 (2005) 日本の敬語論. 大修館.
- 滝浦真人 (2008) ポライトネス入門. 研究社
- 宇佐まゆみ (2001) 『ディスコース・ポライトネスという観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること』. 語学研究所論集6. 東京外国語大学, 1-29.
- 渡辺雅男 (1994). 『現代日本における階級格差とその固定化』. 一橋大学研究年報 社会学研究32, 47-153.

メタ語用論における敬語の位置付け

—敬語をどう捉えるか—

尾 鼻 靖 子

本稿では、敬語がメタ語用論においてどのような位置付けが適切であるかを再考察する。敬語とはどういうものなのかを明らかにするために、これまでいくつかの説が提案されてきたが（ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、わきまえ、indexicality など）、未だに決定的な位置付けはなされていないのではないかと思われる。

従来、「敬語」というと敬語体に変換した言語形式を一括して扱うことが多いが、本稿では、社会的イデオロギーを示唆する「規範的敬語」とスピーチレベルシフトなどに見られる個人の選択によって使用する「ストラテジー敬語」（Obana 2017, 2021）とを区別する。両者は、同じ言語形式を使いながらも、使用条件、対象、効果の全てにおいて異なる様相を呈するからである。

さらに敬語という言語形式は、命題的意味（意味論的意味）を持たない「指標」である。だから、敬語を含む発話は、ストラテジーによって構築された発話に、honorific markings を形態論的に付加した二重構造を持つ。だから、この点においてすでに敬語という言語形式は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであり得ないが、本稿ではさらに使用条件の差異、上下関係を表す方法の違い、使用効果の相違を明らかにすることで、両者は共に indexicality という大きな枠内に入るが、indexicality のレベル、下位分類においては異なるカテゴリーとして区別されるべきであると主張する。

以上、メタ語用論においては、規範的敬語はイデオロギー的社会指標であり、命題的意味はなく、社会的関係を表す言語的証拠であって、適切な使用は「敬意」を示すが、politeness を表すとは限らない。Politeness は発話構築に導入したストラテジーに関わっており、それは敬語発話が二重構造を持っていることに起因している。また規範的敬語と対話中に一時的に使うストラテジー敬語とはその性質上区別すべきである。